

しらかべ



2019年3月19日 人権・同和教育部発行

春暖の候、保護者の皆さま方におかれましてはご健勝のことと存じます。今年度も本校の人権・同和教育にご理解とご協力をいただき厚くお礼申し上げます。そして、「しらかべ」をお読みいただいた感想や本校の人権・同和教育の取組についてのご意見などを懇談で返信いただき、ありがとうございました。来年度も変わらぬご理解とご協力をよろしくお願いいたします。



✦ 自分と向き合うお茶の時間～本校生の読書感想文より（一部抜粋）～

日々の雑踏の中で、何かにつけ一喜一憂する私。しかし、木曜日の放課後だけは、少し違う時間の流れがある。現在、茶道部に所属している私は、共感を求めてこの本を手にとった。ところが、そこには共感を遥かに超えた驚きや学び、また感動の世界が広がっていた。作者でありこの本の主人公でもある森下さんは、20歳の春に初めて「お茶」の世界に出会った。日々抱えている悩みや不安と向き合うなかで、気づけば、そこに「お茶」があった。そんな「お茶」を通して得た様々な気づきを「15のしあわせ」として教えてくれているのが、この本である。

まず、「知る」ことの幸せを森下さんは私に教えてくれた。それは「『自分は何も知らない』ということを知る」ことである。何を今更、当たり前のことを、と思うかもしれない。しかし、私は、中々このことができていないように思える。なぜなら、何に対してでもそうだが、分かっていないのに、分かっている振りをしている自分がいつもどこかにいるからだ。初めてのことなら自分が知らないのは当たり前なのに、それを恥ずかしいことだと思い込んでいる。森下さんの「知る」を通して、改めて「知る」こと＝自分が変わることを考えさせられた気がした。ひどく邪魔で醜いプライドなど捨てて、「ゼロ」の自分を開いて、習うことが今の私に必要なだと感じた。

私の茶道の先生も、お茶にまつわることに限らず、様々な知識を教えてください。掛け軸の解釈や茶道を通して互いを思いやる心など、私の知らないことばかりである。すぐに覚えられないことが多い中で、特にどうしても理解しきれないことが一つある。「目で次の動作を探すんじゃない。頭じゃなく手が先に動くんだろ」と、静寂の中で響く先生の声。何を言っているんだ、頭で考えないって一体どういうことなのか。その答えをお稽古の度に考えては迷走していたのだが、森下さんに大切なヒントをもらった。それは、「自然にわかるのを待つ」という姿勢である。一見、「知る」ことの幸せとは矛盾するようにも見えるが、時間をかけていつか「分かる」日がくるのを待つのも茶道の大きな楽しみなのだ気づかされた。茶道を通して「知る」ことの奥は深い。

ちなみに、私のお茶の先生は年配の男性の方である。先生ご自身も、男性でお茶をたしなむ人は少ないとよくおっしゃる。しかし、そもそも茶道は、男性社会のものだったとも話して下さったことがある。茶道は本来、死と隣合わせの武士が「無」になる時間を求めたことが始まりである。日常に命の駆け引きがある中で、茶室は無になれる唯一の非日常的空間だった。今の私たちからは想像もできない世界だが、私だって日々の生活に「忙殺」されている一人だ。期限が決められた課題に追われ「必死」でそれをこなしている。そう考えると、私が週一回のお稽古をどこかで心待ちにしていることも納得できる。私もかつての武士と同様に、非日常であるお茶室に「無」を求めているのではないだろうか。お稽古をしている時だけは、お茶を点てることだけに「心」を入れることができる。森下さんも、抱え込んでいるタスクが多いと、お茶なんか点てている場合じゃない、と悶々として今にも走り出したいくなっている。しかし、お茶を点て出すと、その一碗だけに集中し、他に思いを巡らせることなど何もない。そしてそれは、誰かのお点前を見ているときも同様である。本の中に、「その時私はどこへも行かなかった。100%ここにいたのだ」という一文がある。まさにその通りだった。忙しく過ぎていく日々のなかで、自分というものを見失いそうになる。しかし、この「お茶」の世界にいる時だけは、

自分という存在が確かなものである、と実感できる。

「日日は好日」-どんな日もその日を味わう。悲しいときはたくさん泣き、楽しいときには思いっきり笑う。それは、どんな時の私もその時の私として精一杯生きることにつながる。堅苦しい作法を覚えるだけだと思っていたお茶の世界は、私をいつも受け入れてくれる第二の家のような存在になった。文化祭では浴衣で月見茶会を開き、初釜では先生が買って来て下さる花びら餅にうっとりする。四季を味わう心を育てながら、その日を全力で生きようと思う。坂出高校茶道部で活動できるのもあと約一年半。短期間で得られるものは少ないかもしれない。しかし、焦らず自分で一つひとつ気づきながら答えを見つけることが成長につながる。お茶を友とし、自分の中の季節を日々感じながら生きていきたい。

【2年生3学期の取組 ～高松差別裁判事件・人権クロスロード～】

2年生は3学期、二本柱で学習を進めました。1月16日には、1933年に起こった**高松差別裁判事件**から、結婚差別について学びました。憲法14条の制定など、大きく社会に及ぼした影響や歴史を知るという意味について学びました。また、1月23日には、各クラスで**人権クロスロード**を実施しました。クロスロードとは、「岐路・分かれ道」を意味します。私たちの日常では、ジレンマを伴う決断を迫られる場面が多々あります。そのようなさまざまな状況を想定し、YES・NOの二択で自分の行動を決定し、その理由を示す、カードゲームの一種です。クロスロードで生徒が取り組んだ問題を紹介します。

- | |
|--|
| ☆ あなたは高校生です。電車の駅前でバスを待っていたところ、高齢者の乗る車いすを介助して階段を昇る二人の女性を見かけました。かなり重そうです。そこにちょうど自分の待っていたバスが来ました。 → あなたは介助に YES 加わる or NO 加わらない |
| ☆ あなたは不動産会社の社員です。お客様から「同和地区以外の物件を教えてください」と依頼されました。 → あなたは同和地区以外の物件を 教える or 教えない |

生徒の間では活発に意見の交換がされました。級友との話し合いを通じて得るものは多かったようです。以下に生徒が書いた感想（一部抜粋）を紹介したいと思います。

- | |
|---|
| ○今日の人権クロスロードをして思ったことは、少数意見に耳を傾けることの大切さです。少数意見の中には自分には考えられなかった意見もあったし、なるほどと思う意見がたくさんありました。多数派の意見があるということは少数派の意見もあるということなので、多数派意見の人が、自分が正解だと決めつけることがないように、少数派の意見に耳を傾けることができたなら、もっとよりよい社会になると思います。 |
| ○私たちの班の人は、困っている人が目の前にいたり、想像しやすい場合には迷わず助けられる人だけど、同和問題など、困っていたり苦しんでいたりが表面化されにくい問題だと、私を含め、とたんに、本来すべき判断ができなくなるということがわかった。同じような人は、もっとたくさんいると思う。同和問題への実感がいまだに湧いていないことがわかる結果だった。 |

1年間の学習を通して印象に残っていることや、学んだことについての感想も、抜粋して紹介します。

- | |
|--|
| ○人権・同和教育の授業で知識を広めなければ差別も広がらないのではないかと考えたこともありますが、でも、一番大切なことはより多くの方が、問題について知って、正しい知識を身に付けることだと思いました。 |
| ○差別というものは他人事ではなくて、僕たちみんなが差別心を持っているということなので、自分たち一人ひとりが自分の差別心と向き合い、差別をなくしていけるようにしていきたい。 |

「知識」として学んできた人権を「自分自身の問題」として積極的に考えることができ、また自分とは異なる意見・価値観の存在への気付きもあったようです。

3年生では、就職・結婚差別の事例から、差別解消に向けての考え方や生き方を見つめます。